
いけないこと？

黒壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いけないこと？

【Nコード】
N6168Q

【作者名】
黒巻

【あらすじ】
昼休みに高校生が下らない話をするだけ。全然、まったく、本当に、絶対、100%断言しますが、別にエロくありません。

「キュウド！」

昼も食べ終えて次の教室へ向かうと、ノートと筆箱を携えて、晴れやかな風の吹き抜ける1階渡り廊下を通る久渡^{キュウド}は、少し遠くの後ろから重なった声を聞いて、ぴくりと肩を震わせた。それから、何事もなかったかのように再び、渡り廊下を西校舎の方へ歩き出した。彼の聞き違いでなければ、今キュウドを呼んだのは彼の知る限り一番厄介な二人組だ。できれば呼ばれなかったことにしたい。ああ、吹き抜ける5月の風が新緑の香りを運んで、なんて爽やかなんだ……。

「キュウド！」

「聞いてくれよ！」

現実逃避には失敗したようだった。

今度は遠くからではなく真後ろから聞こえてくる、やたらとテンションの高い声に、キュウドは嫌々、思い切りため息をつきながら足を止めて振り返った。そして予想通りの人間がいたことにげんざりとしながら、その二人の顔を見上げた。一人は、とにかく背の高い、大柄な男。かなり短くカットされた黒髪と程よく鍛えられた体は、どこかの運動部に所属していそうな程爽やかな見かけだが、この男、趣味も部活も料理である。この男の作った弁当が購買に限定商品としてならんでいる、というのが、学校でまことしやかに囁かれている。もう一人は、すうっと細い釣り目に、すっきりした顔立ちの、キツネ顔の男。高校生男子の平均よりは高い背丈は持っているが、体つきは細く、どちらかと言えば優男だ。目つきは悪いが。金髪・喫煙・喧嘩と教師受けの非常によろしくない3拍子が揃った男だが、キュウドはじめ彼を多少でも知る者は彼をこう評す、「お人よし過剰」と。雨に濡れた子猫が段ボールに入って捨てられていたら、傘をさしてやるどころか普通に連れ帰ってしまうような男だ

った。彼の家は猫屋敷とも呼ばれる。

その二人だが、彼らはライバル関係である。一体何が原因でそうなったのか、主に何に関するライバルなのかは定かではないが、とりあえずお互いにお互いをライバルと認識しているらしい。そしてこの二人、とにかく些細なことで張り合う。やれ餡の多いアンパンを見つけられるのはどっちだだの、女子のスリーサイズをより正確に当てられるのはどっちだだの、牛乳飲んでる相手を笑わせるのがうまいのはどっちだだの、本当に下らない事でばかり張り合う。お前らは小学生か！ とキュウドが怒鳴りなくなったのは1度や2度や3度では済まされない。

そして不思議なことに——キュウドにとっては非常に面倒なことに——今年度に入ってからというものの、二人がその勝敗の判定をキュウドに依頼するようになった。その理由をキュウドは知らない。そもそも、友人どころか顔見知りですらなかったのだ、分かる方が不思議だ。もつとも、キュウドの人に対する興味のなさはそれだけでは済まされないが。キュウドは知りあって1ヶ月も経つ彼らの名前を、未だに知らない。知ろうともしていない。だが彼ら二人の方はキュウドに判定を依頼する。彼ら3人の関係性は、今のところそういうことだった。

「……で、今日は何」

呆れと疲労の色を存分に含んで、キュウドはため息交じりの声を吐きだした。その言葉に、二人の目がざらりと光る。

「いいか、キュウド」

「よく聞けよ」

まず、黒髪の男が口を開いた。

「『細い木の棒でつついてかき回し、粉や白い液体を対象に掛ける。それだけでは飽き足らず、熱した鉄の上に対象をぶち入れ、さらに先ほどの棒でつつき回す。その内に対象は熱で硬くなり、もてあそぶように丸められて、ついには袋の中に入れられてとかされてしまふのだ。』」

「はあ？」

唐突な言葉に、思わず口を開け、半眼になって疑問の声を上げるキユウド。しかし、それに構わず今度は金髪の方が喋り始めた。

「『暗い場所に詰め込まれたそれらの中から、今日もたったの1、選ばれる。選ばれた対象はむりやり自分を覆うものを引つpegされる。そうして相手の手中に収まってしまった対象は、相手の手によって触られ、揉まれ、時に上下に揺さぶられ、そうして最後に冷えた体は打ち捨てられる。』」

「……はあ」

2回目は驚きはないが、2つも訳の分からない話を聞かされて、少々どころでなくげんなりとしたキユウドだった。

「で、どう思う？」

練習したのかと思うほどぴったりとそろった二人の声に、しかしキユウドは意味が分からず首をかしげた。

「どう思っつて、何が」

「簡単に言つと、今の文のどっちがエロかった？」

金髪の言葉に、ああ、とキユウドが納得の声を上げる。今日のテーマは「どちらがより如何わしいか」らしい。それにしても文章が不自然な気もするが、恐らく何かの条件付きで文を組み立てたのだろう。面倒だとは思いつつも、キユウドは一応考えてみた。

「どっちが怪しい雰囲気があるかって言ったら、そっちな」

言つて黒髪を指さすと、黒髪がこっそりガッツポーズをしていた。大柄だからこっそり感はまるでないが。横で金髪が外人のような言葉で表すなら「アウチ」みたいなポーズをとっていた。お前らは漫画のキャラクターか、と言いたくなる仕種だ、と思いながら、キユウドは言葉を続ける。

「ただ、純粹にエロいっつていうならそっちだと思う。……主観だけだね」

そう言つて今度は金髪を差すと、二人のポーズが綺麗に逆転した。見た目が愉快的なライバル関係である。

「……で？」

「うん？」

「え？」

キュウドのこれ以上なく簡素すぎる質問に、それぞれ喜んでいたり落ち込んでいたりした二人が顔を上げた。

「結局、何の勝負だったの？」

「ああ……」

そして、これまた練習したように、ぴったりと声をそろえて二人が言った。

「普通のことをどれだけエロく言い替えれるかの勝負！」

(後書き)

木の棒↓菜箸

粉↓塩胡椒

白い液体↓牛乳

熱した鉄↓フ

ライパン

暗い箱↓抽斗

覆うもの↓包装のビニール

触られ、揉まれ、

時に上下に揺さぶられ↓使う前にやります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6168q/>

いけないこと？

2011年2月3日15時55分発行